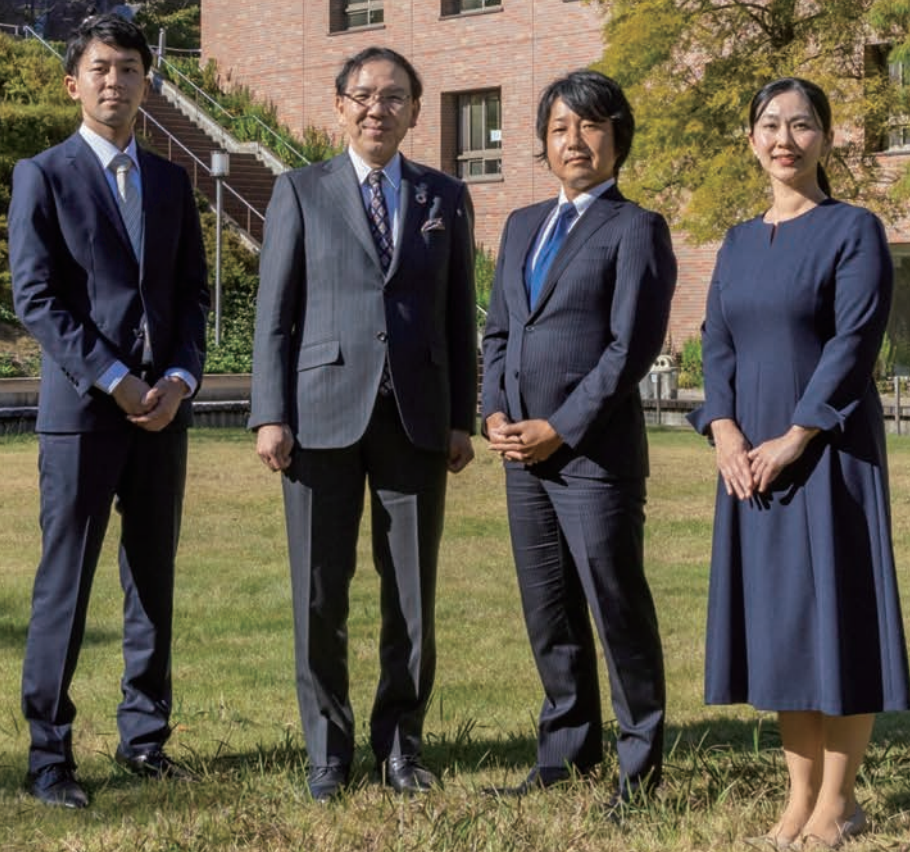


■座談会

「大学院」というキャリアを選ぶ

●未来を支える高度な知識・技能をこの手に



■座談会

「大学院」という キャリアを選ぶ

◎未来を支える高度な知識・技能をこの手に
いつでも誰でも学び続けられる社会へ

川上 悟史 ・内閣官房 教育未来創造会議担当室 企画官（法学部卒業）

杉本 光輝 ・東洋大学 食環境科学部 助教
（理工学研究科 博士課程後期課程3年次生）

田中 晶子 ・外国語教育学研究科 博士課程後期課程2年次生

前田 裕 ・関西大学 学長

生産年齢人口の減少とともに、技術革新力、国際競争力の低下が懸念される我が国において、次世代の日本を支える高度な専門的知識・能力を備えた人材を育成する「大学院」の重要性が高まっている。本学卒業生で、政府が設置する教育未来創造会議の担当室企画官（経済産業省から出向中）を務める川上悟史さん、博士課程で学び東洋大学助教の職に就いた杉本光輝さん。社会人学生として後期課程在学中の田中晶子さんにお越しいただき、政府の方向性や動向、大学院での学びの実体験を交えながら、前田裕学長と、これからの大学院の在り方について議論を深めた。



◆描いた未来図へ。大学院、それぞれの学びの形

——まず、杉本さん、田中さんに大学院での学びについて伺います。杉本さんは2022年9月から東洋大学にて教鞭をとられていますが、大学教員という進路を考えたのはいつ頃からでしょうか？

杉本 前期課程の頃ですね。大学教員への就職を視野に後期課程に進学しました。研究テーマはホタテガイ内臓をはじめとした水産廃棄物の有効活用です。2022年4月頃から就職活動をして、博士号取得見込みの状況ですが、運良く正規雇用での内定をいただくことができました。

前田 まさに研究職を目指す大学院生のロールモデルですね。杉本さんの指導教員は、化学生命工学部の福永健治教授でしたね。

杉本 福永先生には、一人前の研究者になるため、研究面を鍛えられただけではなく、人としても成長させていただきました。大学教員を目指したのも、元々教育・研究に関心はありましたが、福永先生みたいになりたいと感じたからです。

——田中さんは、キャンパスから遠く離れた熊本にお住まいです

が、どのように大学院で学ばれているのでしょうか？

田中 地元の熊本学園大学の前期課程・長期履修制度で3年間研究し、さらに2年間、研究生として在籍しました。私はシングルマザーで当時子どもがまだ小学生だったので、後期課程への進学には不安が大きく、なかなか決心がつきませんでした。しかし、やはり研究者でもあり、教育者でもありたい、そしてアカデミアの世界に身を置きたいと強い思いが湧き、覚悟を決めて関西大学の大学院へ進みました。

やるからには、専門分野である第二言語習得に関する研究を極めたく、現在ご指導いただいている竹内理先生をはじめ、外国語教育学の分野においてトップクラスで活躍されている先生方が多くいらっしゃる関西大学で学びたいと思いました。生活基盤を移すわけにはいかず心配でしたが、大学や先生方の支援のおかげでリモートの場合もしっかりと対話ができ、離れているという感覚はなく、スムーズに研究に取り組むことができています。ちなみに外国語教育学研究科では、2023年度から大学院でのリモート履修制度も始まります。

私の研究テーマは親の関与と子どもの英語学習動機づけです。熊本では大学の非常勤講師と英会話教室の先生もしていますので、教育者・研究者として、また小学生の子どもを持つ保護者としての視点を持ち、自分の研究・理論がすべてにつながっているように思います。

前田 外国語教育学研究科の学生は、現役の英語の先生も多いので、従来からできるだけリモートで受けられるように配慮し、また授業時間帯もフレキシブルに、社会人の方も受講しやすいようなシラバス設計をしています。

川上 リモートで博士号を取るというのは、実際にはなかなか聞いたことがなく、すごく新鮮ですね。コロナの状況も逆手に取って設計された素晴らしい取り組みだと思います。

◆若手研究者を支える経済的支援

——杉本さんと田中さんは、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）「次世代研究者挑戦的研究プログラム（以下：JST次世代研究者プログラム）」に採択された関西大学のプロジェクト「豊富な

産学連携・地域連携と連動させた「考動力」人材育成プロジェクト」の支援対象学生として採用されました。このプロジェクトは博士課程後期課程学生への人材育成プログラムの提供、経済的支援が特色ですね。

杉本 採用されたことで、研究奨励費として生活費も支給されますので、アルバイトをしなくてよく、研究に専念できるようになったことは大きいですね。また研究費もいただいたので、自分の思うように研究を進められ、研究の幅を広げることができました。

田中 私は関西大学大学院特別給付奨学金も受けていて、JST次世代研究者プログラムと併せて本当に助かっています。熊本から大学への交通費などに充てています。

川上 私が経済産業省の大学連携推進室長を務めていた時に、若手研究者の研究環境が厳しくなっていることへの問題意識から、総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）や文部科学省と経産省で、週1ペースで集まって議論をしていました。議論を受けて経産省でも新しいNEDO事業（官民による若手研究者発掘支援事業）を立ち上げましたが、JST次世代研究者プログラムは、この流れ

■座談会



川上 悟史——かわかみ さとし
 ■内閣官房教育未来創造会議担当室企画官(経済産業省から出向中)。1976年大阪府羽曳野市生まれ。2000年関西大学法学部政治学科卒業。在学中は体育会アイスホッケー部所属。2000年通商産業省(現経済産業省)入省。2011年一橋大学大学院商学研究科修士課程修了。2015年産業技術環境局技術振興・大学連携推進課課長補佐。2017年内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部参事官補佐。2019年産業技術環境局大学連携推進室長。2020年製造産業局次世代空モビリティ政策室長。2021年12月より現職。



アイスリンクで息子たちと

大学院レベルの高度人材をどのように増やし、ビジネスの場で活躍してもらうのか。これは目下の大きな課題の一つだと思います。

(川上)

で文科省が作った政策の一つです。しっかりと国の政策が研究者の方に届いているというお話を杉本さん、田中さんから伺うことができて心強く感じました。

——川上さんは、現在、政府の教育未来創造会議担当室企画官をされていますが、日本と諸外国の高等教育の現状をどのように見られているのでしょうか？

川上 ビジネスでもアカデミアでも、ますます高度な学びが必要となっています。背景としては、デジタル分野などを中心に技術革新の動きが非常に早くなっていること。産業界にとっては「難しいことを速くやる必要がある」ため、大学院レベルで学んだ高度人材が必要になってきているのです。例えば、GAFAMをはじめとする世界的IT企業では、自然科学系はもちろんのこと、人文社会科学系でも経済学などの博士号を持った人材を積極的に登用し、先端的な行動経済学やオークション理論などを駆使したビジネスを展開しています。科学技術分野だけでなく、今まさにビジネスのさまざまな分野で高度人材の活躍の場が広がってきているのです。しかし、諸外国の現状と比べると、日本では圧倒的に修士号・博士号取得者の数が少ない。大学院レベルの高度人材をどのように増やし、ビジネスの場で活躍してもらうのか。これは目下の大きな課題の一つだと思います。

前田 人口減少が進む中で、これからの日本社会を誰がどのように支えていくかを考えなければいけません。総人口が減るわけですから、一人一人の生産性を高めなければ、社会を維持し、世界に貢献、発展していくことはできないでしょう。

日本の大学進学率は6割にも達していませんが、アメリカや韓国では7割を超えています。さらに大学院への進学率となると日本は1割程度です。関西大学の理工系3学部では、平均約3割が大学院に進学しています。社会科学・人文科学系は分野で偏りがありますが、もっと少ない。文系であっても、大学院進学という選択肢はもっと選ばれていいはずですが。また、アンコンシャス・バイアスなど日本社会の問題もありますが、女性の研究者・大学院進学者が増加することを我々は望んでいます。

大学院進学にあたって大きな壁になるのは、やはり経済的な問題でしょう。学費で奨学金を利用しても借金には変わりありません。さらに日本では、大学院修了という肩書が、就職やキャリアパスにおいて、必ずしも有利にならないという問題もあります。厚生労働省の調査(令和3年賃金構造基本統計調査)によれば、40～44歳で大学卒業が月収約36万円、大学院修了なら約49万円と10万円以上の差はありますが、これが大学院進学へのモチベーションに直接つながるかどうかは疑問が残ります。諸外国では、大学院修了でも修士か博士かによって、例えばMBA(経営学修士)を持つ人と、さらに博士号を持つ人では、入社時から収入・所得に圧倒的な差があります。大学院修了後のキャリアパスと処遇の低さは日本社会全体の課題として考えないといけません。

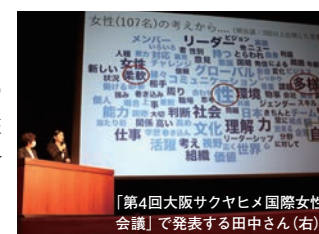
川上 大学院進学は言わば自分への投資になります。投資に見合ったリターンを得ることができるのか、すなわち投資対効果で考える方もいるでしょう。政府としても、若手研究者支援という切り口で大学院進学への経済的支援を進めてきていますが、2022年5月に教育未来創造会議で取りまとめた第一次提言を受けて現在、修了後の所得に応じた返還・納付を可能とする「出世払い」の奨学金、いわゆる日本版HECS(高等教育拠出金制度)の大学院段階での導入が文科省で検討されています。一方で、経産省では、学びの成果を企業内での賃金アップや昇進といった処遇や、労働市場での転職によるキャリアアップに生かしていくための環境整備を進めています。学びへの投資にかかる経済的負担の軽減と、学びの成果の産業界などでの積極的な評価、この両面が必要だと考えています。

◆分野を超えた交流が起こすイノベーション

前田 大学院教育も変化を遂げてきています。かつて大学院では一つの専門領域を究めればよいという傾向でしたが、社会では応用可能で、分野や業態を問わず活用するために必要となる汎用性の高い能力が求められています。今は大学院に進学すれば、インターファカルティや周辺の領域の学問に触れること、また企業等でのインターンシップを通じて視野を広げること等で、専門領域だけではなく幅広い知見を深めることができると思います。本学のJST次世代研究者プログラムでは、研究と実社会にまたがるトランスファブルスキルの醸成、分野を超えた横のつながりを意識したプログラムを展開しています。

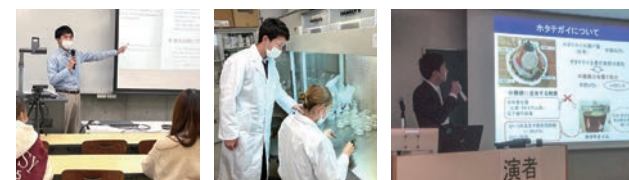
杉本 私はJST次世代研究者プログラムに参加したことで、今後の研究活動に関する視野が広がりました。これまで絶対になかった文系分野の方々との交流が特に刺激的で、例えば文系が強いアンケート調査を、自分の研究にも取り入れてみたいと思うきっかけになりました。

田中 JST次世代研究者プログラムのインターンシップとして、大阪商工会議所主催の第4回大阪サキヤヒメ国際女性会議に出席しました。専門分野が異なる博士課程の学生3名で共同してアンケート調査と



杉本 光輝——すぎもと こうき
 ■東洋大学食環境科学部助教。関西大学大学院理工学研究科博士課程後期課程3年次生。1996年大阪府大阪市生まれ。2014年関西大学高等部卒業。2018年関西大学化学生命工学部生命・生物工学科卒業。2020年関西大学大学院理工学研究科化学生命工学専攻生命・生物工学分野修了。2022年9月より現職。

▼(左・中)東洋大学での講義・研究の様子
 (右)「令和3年度日本水産学会春季大会」での発表



分析、発表まで行いましたが、研究結果・データに対する企業の需要と、データの正確さの重要性を改めて実感しました。

川上 昨今、政府もジョブ型研究インターンシップを推奨しています。博士の方を職場に迎えることで、企業が環境を変えるきっかけになる効果もあります。インターンシップを経て就職という選択肢が明確になった人もいれば、アカデミアに戻った人もいます。大学院で培った研究課題や問いの設定、仮説の立て方などがビジネスの場でも役立ったという声もあれば、企業で見聞したことがアカデミアに戻ってからの研究の視野を広げるきっかけになったという声もあります。インターンシップは双方にとって非常に重要なツールだと感じています。

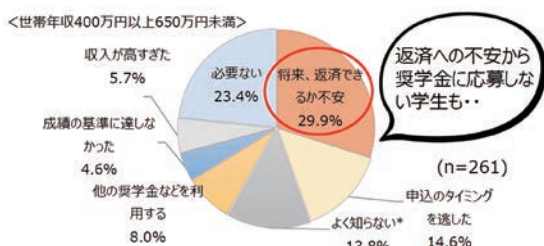
◆人生100年時代。自分をアップデートする学び直し

——教育未来創造会議の第一次提言では、学び直しを促進するための環境整備が要点の一つに挙げられています。学び直し、リカレント教育についてお話を伺えますか？

川上 日本では、大学・大学院を出ても20代で学びが終わります。

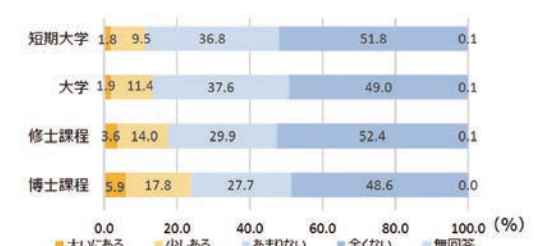
進学するにつれて経済的不安は増大
 勉強継続にあたり経済的不安を感じる者は、博士課程では2割以上

日本学生支援機構の奨学金(給付・貸与)に応募しなかった主な理由



(出所) 文部科学省・国立教育政策研究所「高校生の進路に関する保護者調査」(令和元年度)より作成。

学生の不安や悩みのうち「経済的に勉強を続けることが難しい」への回答



(出所) 独立行政法人日本学生支援機構「令和2年度学生生活調査」より作成。

出典:「教育未来創造会議 第一次提言のポイント」(2022年5月・内閣官房 教育未来創造会議担当室)

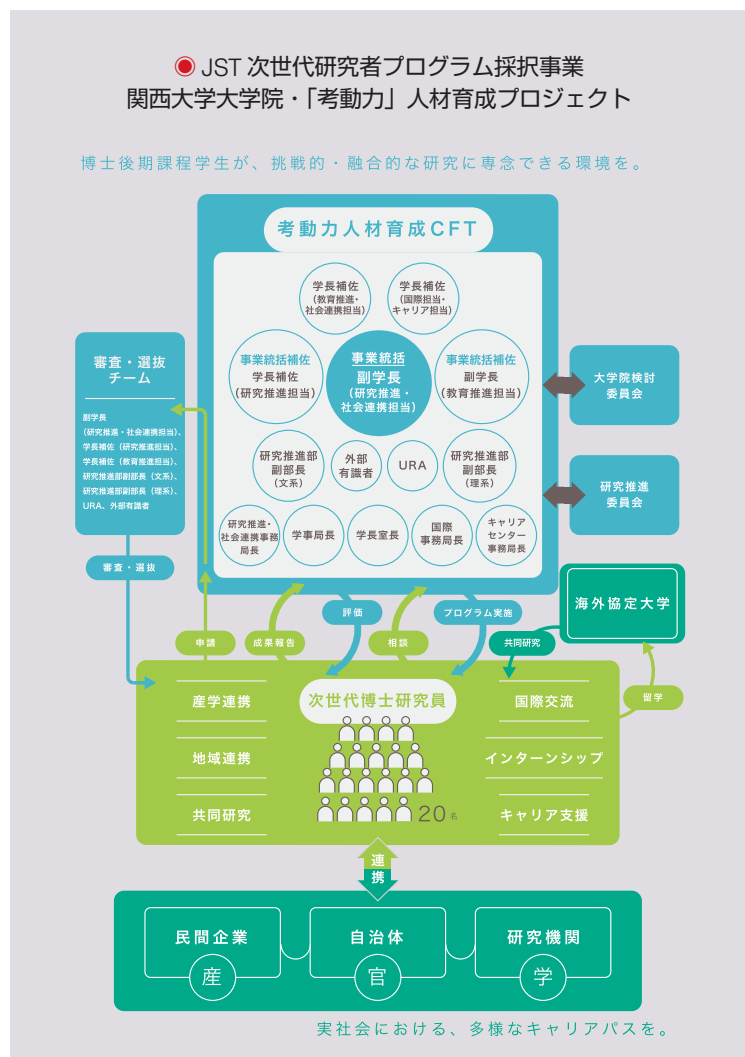
■座談会



前田 裕——まへだ ゆたか
 ■1956年大阪府大阪市生まれ。1979年大阪府立大学工学部卒業。1981年大阪府立大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了。工学博士。1979年大阪府立高等学校教諭。1988年関西大学に着任し、2002年工学部教授。2008年システム理工学部長、2009年大学院理工学研究科長を歴任し、2012年副学長。2020年10月より現職。公益財団法人関西生産性本部理事。特定非営利活動法人大学コンソーシアム大阪副理事長。財団法人大阪科学技術センター参与。

変化の局面を迎えた時、
 自分は変化していける、挑戦していけるとい
 う自信の根拠となる場所が大学院だと思ひます。

（前田）



実社会における、多様なキャリアパスを。

ら100年時代になり、ずっと同じ職場や専門でいる働き方ではなくなりました。これからは変化は避けられない。ではどのように変化に備え、対応していくのか。学問系統には、自然科学、人文科学、社会科学と最後に「科学」が付きますが、学問を修得する際、どの分野も共通して必要なのは科学的なアプローチです。その本質となる「学び方を学ぶ」ことができるのが大学院だと思います。

学問の世界では、研究テーマはすぐに古くなりますので、新しいテーマや問いを見つけ続けなければならないといけません。ビジネスにおいても同じで、大学院での高度で専門的な教育・研究に接した方は、社会に出て、変化のタイミングが来た時に、変化に対応するイメージを持って、自分を変えていくことができるだろうと思っています。——田中さん、川上さんは社会人になってから大学院で学ばれていますね。

田中 私の専門である英語教育も時代とともにどんどん変化しています。2020年度の新学習指導要領全面实施により、英語教育が小学3年生から始まるようになりました。時代に合わせ、自分の知識もアップデートしながら教育をしていく必要を感じています。
川上 私が就職した経産省では2年ごとに異動があり、消費者保護政策やM&A制度、経済成長戦略の策定など部署が変わるごとに全く違う仕事をしてきました。そのたびにほぼOJTで勉強しましたが、付け焼き刃だと限界を感じ、30歳過ぎに人事院の制度を使って大学院で経営学を学ばせていただきました。大学院では最新の経営理論やフレームワークを習得したわけですが、これらを実際に使うための思考法、学長がおっしゃった「科学的なアプローチ」の一つに当たるとは思いますが、問いを見つけて仮説を立て、エビデンスを集め、理論に基づいて分析し突き詰め、反復するという研究手法のセットを徹底的に叩き込まれました。こうした学びの後は景色が変わったような印象でした。企業関係者の皆様と深い議論ができるようになりましたし、市場動向や経営状況などを論理的に分析して理解し、深い思考をして政策立案ができるようになったと思います。今、畑違いともいえる教育政策を担当していますが、ここでも大学院で得た思考法を生かすようにしています。まさに大学院で仕事の能力をアップデートできたなど実感しました。

ただ、どうしても大学院、特に博士課程となると研究者養成の色が濃いため、研究者ではない産業界などへのキャリアパスも含めた大学院の出口の複雑化を進めていくことも必要かなと思います。

◆大学院の充実、大学業界発展の鍵

——関西大学大学院の今後に期待することをお聞かせください。
杉本 東洋大学への採用が決まり、ちょうどその就職前に、JST次世代研究者プログラムの一つ、プレFDプログラム「大学院生のための教育実践セミナー」を受け、とても役に立ちました。シラバスの作り方は誰かが教えてくれるわけではありませんので、これを受講していなければ、一体どうやってシラバスを作ればいいのか途方に暮れていたでしょう。こういったアカデミア職に進む方への支援も増えるとありがたいと思います。
川上 誤解を恐れずに申し上げると、学部の位置付けや序列は、背景に入試の偏差値などがあり、大学の意思だけで大きく変えるこ

私の専門である英語教育も時代とともに
 どんどん変化しています。時代に合わせ、自分の知識も
 アップデートしながら教育をしていく必要を感じています。

（田中）

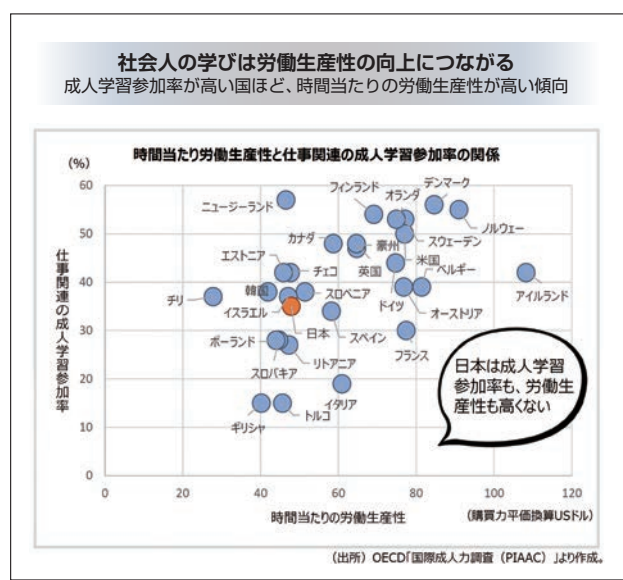


田中 晶子——たなか しょうこ
 ■関西大学大学院外国語教育学研究科博士課程後期課程2年次生。1981年熊本県熊本市生まれ。2005年熊本学園大学外国語学部卒業。2019年熊本学園大学大学院国際文化研究科修士課程修了。高校英語教師を経て、学習塾、英語教室で英会話を指導。2021年4月から東海大学ユニバーシティビュロー—語学教育センター英語教育部門非常勤講師。



▼（左）熊本での子ども向け英会話教室
 （右）「令和4年度熊本子ども会育成協議会総会」での講演

とは難しいのではないのでしょうか。しかし大学院には、少なくとも偏差値という概念はないですから、必ずしも序列が固定化しておらず、より教育・研究、人材育成といった中身の勝負になってくると思うのです。従って、大学院の充実によって、大学全体のブランド価値を飛躍的にあげることができるでしょうし、ひいては学部の位置付けをも変える起点にできるかもしれない。また、社会人も呼び込むことで少子化の中での成長戦略も描けるでしょう。大学院は、これから関西大学がさらに発展するための鍵だと思っていますので、卒業生の立場としても学長に大いに期待しております。
前田 今回は大学院をテーマに、皆さんから多様なご意見をいただき、大変ありがたく、本学にとっても貴重な座談会となりました。一人でも多くの方に大学院教育に関心を持っていただきたいという思いを強くしました。変化の局面を迎えた時、自分は変化していける、挑戦していけるといいう自信の根拠となる場所が大学院だと思っています。関西大学大学院のみならず、社会における大学院の位置づけを確かなものにしていけるよう、これからはご支援をお願いいたします。

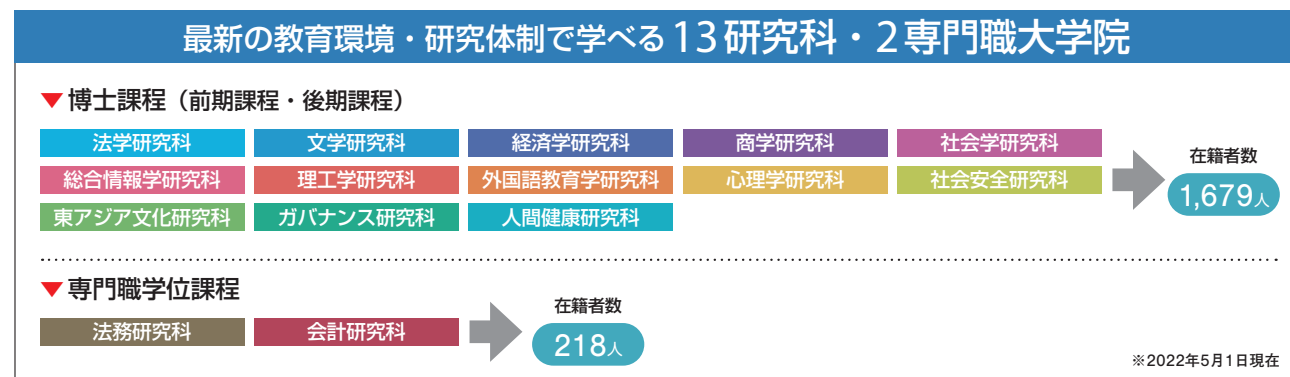


出典：「教育未来創造会議 第一次提言のポイント」（2022年5月・内閣官房 教育未来創造会議担当室）

■大学院紹介

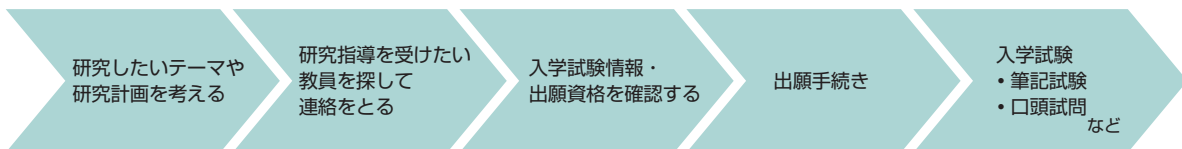
より深く学びたい、もう一度学びたい 関西大学大学院で学ぶ

関西大学大学院は総合大学の特長を生かし、15研究科(2専門職大学院を含む)を設置しています。
また、あらゆる属性や年齢層の方が目的に合わせて学修・研究できるよう、さまざまな制度を整備しています。



1 ● 大学院進学のためのステップ

大学院で研究したいテーマや研究計画を考えたらうで、研究指導を希望する教員を探して連絡をとるところから準備がスタートします。



2 ● 学修環境の支援

関西大学大学院では充実した学修・研究環境とともにさまざまな支援制度を整えています。

■ 奨学金

本学独自のものから、国や民間・地方団体等が実施するものまで、入学試験・学業の成績や家計状況等により、学費支弁をサポートするさまざまな奨学金制度を整えています。

給付奨学金制度	貸与奨学金制度
- 関西大学大学院特別給付奨学金 - 関西大学大学院給付奨学金 - 教育助成基金給付奨学金 - 関西大学社会人大学院学生給付奨学金 その他、専門職大学院対象の給付奨学金制度、民間や地方団体等及び指定寄付に基づく奨学金 など	- 日本学生支援機構第一種奨学金 - 日本学生支援機構第二種奨学金 その他、民間・地方団体等奨学金 など
	緊急・応急奨学金制度
	- 関西大学災害時支援給付奨学金 - 関西大学家計急変者給付奨学金 - 関西大学短期貸付金

■ 学会補助

国内での学会出席や国内外の学会での研究成果の発表に関する費用の一部を補助します。

国内での学会発表・出席	海外での学会発表
発表2万円、出席1万円 (年間上限2万円)	往復航空運賃の半額 (年度内1度、上限10万円)

■ TA（ティーチング・アシスタント）・RA（リサーチ・アシスタント）

将来、教育職・研究職等に就くことを視野に入れ、そのトレーニングの場としての授業や実験・実習等の補助者(TA)またはさまざまな教育研究プロジェクトの補助者(RA)として任用し、実践的キャリアの形成と経済的な支援をしています。

■ 博士課程後期課程学生への経済的支援プログラム

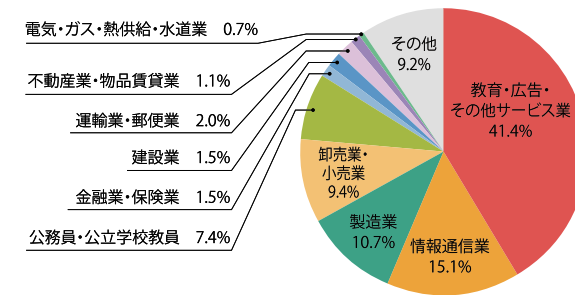
関西大学大学院は、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)「次世代研究者挑戦的研究プログラム」の選定を受け、優秀な博士課程後期課程学生の経済的支援を強化するとともに、挑戦的・融合的な研究を支援しています。支援対象学生には、採用期間中、生活費相当額200万円(年額)と研究費30万円+α(年額)に加え、国際活動経費等(研究計画により別途)を原則3年間支給しています。

3 ● 修了後の進路

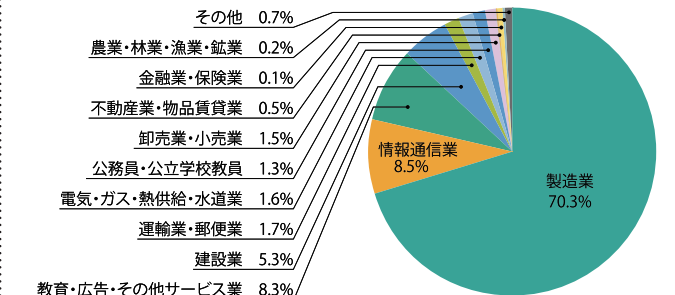
キャリアセンターを中心にさまざまなキャリア・就職支援プログラムを用意し、大学院で学んだ学生の興味・能力・適性に応じたキャリアデザインの実現を支援しています。

修了後の就職状況（過去3年間の実績）

【文系】



【理系】



【就職先一例】

アビームコンサルティング／EY新日本有限責任監査法人／エヌ・ティ・ティ・データ／KPMG税理士法人／ダイキン工業／日本電信電話／富士通／本田技研工業／毎日放送／三菱重工業／ヤフー／国家公務員総合職／国家公務員一般職／国税専門官／大阪府教員 など

【就職先一例】

花王／鹿島建設／関西電力／近鉄不動産／クボタ／資生堂／ダイキン工業／東海旅客鉄道／トヨタ自動車／日本電気(NEC)／パナソニック／日立製作所／三菱地所／三菱重工業／山崎製パン／大阪府職員 など

4 ● 大学院での多様な学びのスタイル

「仕事を続けながら学びたい」「資格取得のために特定の科目の単位だけ修得したい」「興味あるテーマの授業だけを受講したい」等、さまざまな学びのニーズにも対応しています。

長期履修学生制度	梅田キャンパスでのリカレント教育
一部の研究科では、修業年限2年間の前期課程を3年とし、計画的に履修することができます。	梅田キャンパスでは都心部の立地を生かし、ビジネスパーソンや公務員等の社会人を対象に、平日夜間や土曜日を活用した大学院教育プログラム(履修証明プログラム)や講座を開講しています。
科目等履修生	〈現在開講中のプログラム・講座〉
4年制大学卒業者等を対象に、大学院の授業科目を3科目／学期を限度に履修することができます。履修した授業科目の試験に合格すると所定の単位が修得できます。	- 海外子会社の経営を担う人材を養成する大学院教育プログラム(履修証明プログラム) - 地域政策コーディネーターを養成する大学院教育プログラム(履修証明プログラム) - 社会人向け「夜間集中」ビジネス講座(会計研究科 提供) - 関西大学オープンカレッジ 梅田 MeRISE(随時多様なプログラムを開講しています)
聴講生	
4年制大学卒業者等を対象に、大学院の授業科目を3科目／学期を限度に履修することができます。単位の修得を目的とせず、自身の興味や関心のある授業科目を受講してみたい方に適しています。	梅田キャンパスでのリカレント教育 https://www.kansai-u.ac.jp/relearn/worker/index.html



大学院への扉を開く――

関西大学大学院 入試情報サイト

https://www.kansai-u.ac.jp/Gr_sch/



研究最前線

現代日本政治と利益団体の研究 • Study of Contemporary Japanese Politics and Interest Groups

岩崎卯一先生から継承される 関大政治社会学の系譜

客観的視点で、社会と政治の動態をとらえる

The Genealogy of Political Sociology at Kansai University Inherited from Professor Uichi Iwasaki

Understand the Social and Political Dynamics from an
Objective Perspective

●政策創造学部 小西 秀樹 教授

• Faculty of Policy Studies — Professor *Hideki Konishi*



▲上林先生(前列中央)と門下生の皆さん。小西先生は後列左
Professor Kanbayashi (front row center) and his students.
Professor Konishi is on the left in the back row.

関西大学が大学令に基づき大学に昇格した100年前、大学初の専任教授の1人だったのが、後に学長に就任する岩崎卯一だった。岩崎は社会学、政治学分野を専門として、国家現象の本質や社会学説史、実践的な社会政策等を、学際的なアプローチによって多角的・客観的に分析して論じた。その学風は、岩崎の薫陶を受けた上林良一教授から、さらに上林教授の教え子である小西秀樹教授へと受け継がれた。関西大学の源流とも言える小西教授の研究は、利益団体などの多様なアクターが影響し合いながら、時代と共に動いていく戦後日本の政治過程を解き明かす。

A hundred years ago when Kansai University gained university status under the University Ordinance, Uichi Iwasaki, who later became the university president, was one of the first full-time professors at the university. He specialized in the fields of sociology and political science, and he analyzed the nature of state phenomena, the history of sociology, and practical social policies from a multi-disciplinary and objective perspective. These academic traditions were passed down from Professor Ryoichi Kanbayashi, who was under Iwasaki's tutelage, to Professor Hideki Konishi, who was a student of Professor Kanbayashi. Professor Konishi's research, which can be said to be the origin of Kansai University, reveals political processes in postwar Japan, in which various actors such as interest groups influence each other and move with the times.



◀ 研究室の本棚には大学院生時代の指導教員・上林良一教授から受け継いだ蔵書が並ぶ
Professor Konishi's laboratory with a collection of books inherited from Professor Kanbayashi

▼ 学部生時代に在籍した千里山法律学会から出場した討論会で準優勝し授与された賞状
Certificate of award for winning second place in a debate contest while a student



「日本政治をやるのは早い」と言われた大学院時代

——現在の専門分野について教えてください。

専門分野は政治社会学です。特に、戦後日本政治における利益団体と政党の関係を中心に、政治の理念ではなく、現実の社会構造と政治過程、政策の関係を実証的に研究してきました。利益団体には、経営者団体、労働者団体、あるいは環境保護運動といった市民運動など、さまざまな組織や集団があります。

政治に興味を持ち始めたのは高校生の頃で、友人たちとよく議論していました。ちょっと変わった高校生ですね。当時は中曽根長期政権の時代でした。そして1986年、ちょうど関西大学創立100年の時に、法学部政治学科に進学し、3年次からは、現代政治をやるならここだと学生間でも評判だった上林良一先生のゼミに入りました。利益団体の研究も、上林先生が長年取り組まれてきたテーマの一つです。

——上林先生のご指導はどのようなものでしたか。

上林先生は理論的かつ紳士的な方で、落ち着いた、優しい雰囲気のご指導でした。当時はリクルート事件、冷戦終結、そしてバブル崩壊など、日本経済、政治が大きく揺れ動いた時代。卒業論文は「自民党の派閥政治」をテーマにまとめ、大学院でも上林ゼミを志望しました。私は当然、日本政治を継続して研究できると思っていましたが、上林先生から「現代の日本政治の研究など、100年早い。諸外国の政治からしっかり学びなさい。日本の制度と似たところがあるイギリス政治を研究しなさい」と言われ、それまで考えもしなかったイギリスの議会や政党、利益団体の歴史を研究することになりました。もういきなり大荒野に放り出されたような気持ちだったのを覚えています。結局、後期課程も含め大学院5年間は、ヨーロッパにおける政党政治、利益団体の研究を続けました。当時のイギリス政治はサッチャー保守党政権の末期で混迷の度を深めており、変動期の日本政治を考える上で、比較しながら勉強になることが多かったですね。

研究したいと願っていた日本政治に本格的に取り組めたのは、結局、関西大学の教員になってからでしょうか。実際に「政治過程論」などの授業の内容を固めるためにも、日本政治について論文にまとめ、日本政治に関する教科書も分担執筆するようになりました。

“It is too early to study Japanese politics” - Graduate school

—— What is your current area of expertise?

I specialize in political sociology. In particular, my focus is on the relationship between interest groups and political parties in postwar Japanese politics, and I have conducted empirical studies on the relationship among actual social structure, political processes, and policies, not political ideals. Interest groups consist of a variety of organizations and groups, such as employers' associations, labor unions, or civic movements including the environmental protection movement.

My interest in politics began when I was in high school, and I would often discuss politics with my friends. I was kind of a strange high school student. It was the era of Nakasone's long-term administration. In 1986, the 100th anniversary of the foundation of Kansai University, I entered the Department of Political Science in the Faculty of Law, and from the third year on, I joined a seminar taught by Professor Ryoichi Kanbayashi, who had a good reputation among students that this was the best place to learn modern politics. The study of interest groups was one of the themes Professor Kanbayashi had been working on for many years.

—— What was Professor Kanbayashi's teaching like?

Professor Kanbayashi was a theoretical and gentlemanly person, and he taught in a calm and gentle manner. At that time, the Japanese economy and politics were greatly shaken by the Recruit scandal, the end of the Cold War, and the collapse of the bubble economy. I wrote my graduation thesis on LDP factional politics and applied for Professor Kanbayashi's seminar in the graduate school. Of course, I thought I could continue to study Japanese politics, but Professor Kanbayashi said, "It's 100 years too early to study modern Japanese politics. Learn from the politics of other countries. Study British politics, whose system shares similarities with that of Japan." So, I started to study the history of British parliament, political parties, and interest groups—topics had never even thought of before. I remember having felt I was suddenly thrown into the wilderness. In the end, I continued studying party politics and interest groups in Europe for five years in graduate school, including my doctoral course. British politics at that time was getting more and more chaotic at the end of the Thatcher Conservative Party administration, so I learned a lot comparing that with Japanese politics during the period of change.

It was not until I became a faculty member at Kansai University that I was able to seriously work on research regarding Japanese politics as I previously wanted. In fact, in order to finalize the content of classes such as Theory of Political Process, I began to write theses on Japanese politics and co-author textbooks on Japanese politics.

—— Why did you decide to go to graduate school instead of getting a job?

When I was an undergraduate student, I was approached by an upperclassman at my boarding house and asked if I would join the

研究最前線



◀ 小西教授の共著書 (分担執筆)
Books co-authored by Professor Konishi

——就職ではなく、大学院へ進学しようと思ったのはなぜでしょうか。

学部生時代、下宿先の先輩から声を掛けられ、学術研究会「千里山法律学会」に入部し、学生同士で法律について勉強し、他大学の学生と大会で討論するという活動をしていました。私は民法の研究チームに属し、3年次に出場した大阪弁護士会主催の討論大会で、準優勝することができました。当時はバブル絶頂期で、企業から入社のお誘いもありましたが、本来の志望である政治学の研究意欲が俄然強くなったのも、この千里山法律学会での活動のおかげです。

政治はどう動くのか。安易に評価せず、現実を知る

——2007年からは新設の政策創造学部に移籍されました。

政策創造学部は、地域社会や地域活性化といったテーマに関心を持つ学生が多く、私自身も戦後日本の政治研究と同時並行で、地方自治体や地域政治の研究にも領域を広げることになり、日本各地に実態調査に行き、その内容や成果を授業やゼミで生かすようになりました。

——現代政治を研究するにあたって、心掛けていることはありますか。

学生には簡単に善し悪しを決めるのではなく、どのような理由や仕組みで政治が動いて、今の政策形成につながっているのか、その過程や背景を知ることが大切だと伝えるようにしています。それは、私も上林先生から叩き込まれたことです。

今振り返ると、学部時代、上林ゼミに入ったばかりの頃の私は、テレビの討論番組などで聞きかじったことを、そのままゼミで話していて、恐らく上林先生は、浅はかなことを言っているなと思われるのではないのでしょうか。それを直すために、イギリスを研究しなさいと仰ったのではないかと今更ながら感じています。

現実の政治を扱うからこそ、表面だけで安易に評価したり、意見を口にしたりしてはいけません。そういったストイックな部分を上林先生は持たれていました。先生は終戦間際に海軍に入られ、戦地に赴く前に終戦を迎え、勉学の道に戻られた。それまでの価値観が全て揺らぐ社会状況の中で、大学生として勉学を再スタートされた。その影響もあってか、一つの価値観にとらわれ過ぎず、幅広く、多角的に物事を見るべきだと考えられていたように思います。

その上林先生を指導されてきた岩崎卯一先生もまた、第一次世界大戦の真っ只中に渡米し、社会学や政治学を勉強され、帰国した時の日本は大正デモクラシー。やはり岩崎先生も、激動の時代を生きる中で、政治や社会の動きを多様に、多角的に見ることの重要性を示されています。それを、上林先生へと伝えられたのではないのでしょうか。

岩崎先生が38年、その後上林先生が38年、そして私が教鞭を

執って24年、合わせて100年になります。私自身は本当に微力ですが、関西大学で岩崎先生から始まった、現実の社会や政治動態を考察する政治社会学研究の流れを引き継いでいけたらという思いがあります。

主体性を尊重。多角的に現実を視る力を育てる

——大学院ではどのような指導をされているのでしょうか。

どんな研究テーマを選ぶのかは、大学院生自身に、自由に任せています。首相のリーダーシップや政権交代、日本外交から農業政策、教育政策など、大学院生が選ぶテーマは幅広くありますね。

ガバナンス研究科には本学学部や他大学からの進学者のほか、社会人や留学生も在籍し、地方議員やビジネスマン、専門職の資格を持つ方など、さまざまなフィールドから世代を超えて集まっています。多彩な方が相互に刺激を与えながら、多角的に研究を掘り下げてもらえたらいいですね。ガバナンス研究科は学際的で、教員の専門も政治、法律、経済など幅広く、いろいろな分野の専門家から指導を受けることができます。指導教員と副指導教員が連携して大学院生を指導する仕組みを取っており、大学院生の研究テーマに応じて、教員を組み合わせています。大学院生の主体性をまず尊重し、その上で学術的に論文に仕上げられるようなサポートをしているわけです。

現実の政治は非常に生々しいもので、それを適切に学生に説明するのはなかなか難しい。学生は自分の関心のあるものばかりをネットで見聞きし、表面的な見方のまま、自分の中で納得してしまうことがあります。自分の世界だけに留まるのではなく、広く現実を知ってほしい。本当の現実はあるのかで作り上げた“現実”だけではない。皆が今まさにこの現実を作っている。その皆がどのように動き、どのように考えているのか、その仕組みをしっかりと学んでほしいと思っています。また、自分の描く結論に向けて、どう論理を組み立てるのか、そのプロセスを楽しんでほしいですね。

学生は授業で学んだことを参考に、現実の政治というもの自身でとらえ、判断し、実際の行動につなげていきます。学生に与えるその影響は大きく、教員として重責を感じています。「教室では学生との対一の気持ちで授業をしろ」と上林先生から諭されたことがあります。常に緊張感をもって真剣に取り組まねば一顧の価値もない、ということです。先生のこの言葉が今も私の支えです。学生時代から過ごすこのキャンパスで与えられた自身の責任を果たしていきたいと思っています。——研究上の今後の抱負をお聞かせください。

まず一つは、やはり歴代最長の安倍政権をどうとらえるのか、首相、自民党、そして利益団体、これらの関係がどのように変わったのか、具体的な事例を踏まえ研究していくこと。もう一つは、少子高齢化や過疎化がますます深刻になっていく社会状況の中で、日本の地域社会ではどのような変化があったのか、コロナ禍の影響も含め、地域政治や国土政策の新展開を調査・追究していくことが目の前の課題です。



Senriyama Law Society, an academic research group. There, I studied law with students and debated with students from other universities. I was a member of the civil law research team and in my junior year won second place in a debate contest sponsored by the Osaka Bar Association. At that time, it was the height of the bubble economy, and companies offered me a position, but thanks to my activities at the Senriyama Law Society, my desire to study political science, which was my original ambition, suddenly grew stronger.

How does politics work? Know the reality without evaluating carelessly

——In 2007, you were transferred to the newly established Faculty of Policy Studies.

The Faculty of Policy Studies has many students who are interested in themes such as local communities and regional revitalization, and I myself decided to expand my field of research into local governments and regional politics at the same time as I conducted political research in postwar Japan. I visited various regions in Japan to conduct fact-finding surveys, and I began to use the results of these surveys in classes and seminars.

——Do you have anything in mind when you study modern politics?

I tell students not to rush to a decision but to learn the reasons and mechanisms by which politics operates and the processes and backgrounds that lead to the formation of current policies. That is what Professor Kanbayashi taught me.

Looking back now, as an undergraduate student, when I first joined Professor Kanbayashi's seminar, I talked about what I had heard on TV discussion programs in the seminar, and Professor Kanbayashi was probably thinking that my comments were superficial. I now feel that is why he told me to study British Politics to correct it.

Because we deal with real politics, we should not make superficial evaluations or express opinions. Professor Kanbayashi had such a stoic side. He joined the Navy just before the end of the war and returned to his studies as the war ended before leaving for battle. He started studying again as a university student in the society where all his previous values were shaken. Because of this, he believed that people should not be too obsessed with a single set of values but should look at things in a broad and diversified way.

Professor Uichi Iwasaki, who had been mentoring Professor Kanbayashi, also went to the United States at the height of the First World War. There, he studied sociology and political science. When he returned to Japan, Japan was a country of Taisho Democracy. Professor Iwasaki has also shown the importance of looking at political and social movements in a diverse and multifaceted way in turbulent times. He may have taught that to Professor Kanbayashi.

Professor Iwasaki taught for 38 years, Professor Kanbayashi for 38 years, and I have been teaching for 24 years. That is 100 years in total. My contribution may be limited, but I hope I can continue the

◀ 関西大学博物館内で展示されている岩崎卯一元学長のコーナー前で
In front of former president Iwasaki's exhibit at the University Museum



◀ 小西教授の論文集
Collection of theses
by Professor Konishi

trend of political sociology study—examining real society and political dynamics—that began at Kansai University with Professor Iwasaki.

Respect for independence. Nurture a multifaceted view of reality

——What kind of academic advice do you provide in the graduate school?

I leave it up to students to choose their research theme. The themes graduate students choose range from the leadership of the prime minister, the change of government, and Japanese foreign policies to agricultural policies and education policies.

In addition to students from our faculty and other universities, working adults and international students are also enrolled in the Graduate School of Governance. Members of various fields, such as local assembly members, businessmen, and those with professional qualifications, come from all generations. It would be nice if various people dig into research from various aspects while inspiring each other. The Graduate School of Governance is interdisciplinary, and its faculty members specialize in a wide range of fields, including politics, law, and economics. Students can learn from faculty members in a broad range of fields. The academic advisor and the assistant advisor work together to provide guidance to graduate students, combining faculty members based on the research theme of each student. We respect the independence of graduate students first, and then support them so that they can complete their theses academically.

Real politics is so raw that it is hard to explain it properly to students. Students see and hear only what they are interested in on the Internet, and they may be satisfied with their superficial views. I want them to know the reality widely, not just stay in their own world. The reality is not just the reality created by one's own ideas. Everyone is making this reality right now. I want them to learn how everyone behaves and thinks. Also, I want them to enjoy the process of how to build a logic to reach a conclusion they have in mind.

Using what they learn in class as a reference, students grasp and judge real politics by themselves, and this leads to actual actions. The impact on students is considerable, and I feel a heavy responsibility as an instructor. Professor Kanbayashi once admonished me to teach as if one-on-one with each student. It means that if I don't always take it seriously and earnestly, it is quite worthless. His words still support me. I want to fulfill the responsibility I was given at this campus where I spent my days as a student.

——What are your future research ambitions?

The first is to study based on concrete cases how to perceive the Abe administration, which is the longest in history, and how the relationships among the prime minister, the LDP, and interest groups have changed. Another is to study and pursue new developments in regional politics and national land policy, including the impact of COVID-19, and what changes have taken place in Japanese local communities in the midst of an increasingly serious social situation with the declining birthrate, aging population, and depopulation.

LEADERS NOW!



先天性ミオパチーは、生まれつき筋組織の形態に異常があり、「筋力が弱い」「体が柔らかい」などの筋力低下に関わる症状を引き起こす難病だ。濱谷さんは、先天的なこの病気により、車いすと人工呼吸器を使用しており、日常生活に介助が必要な状態だ。

濱谷さんには自分を常に前向きにしてくれるものがあった。それは勉強だ。「単に学ぶことが好きでだけ」と謙遜するが、中学生の時には、5教科でオール10の成績を修めるほどの勉強家。「将来は大学で学んでみたい」、そう望むのも当然だった。ところが、高校進学の際で壁が立ちあがった。公立高校ではエレベーターなどバリアフリー化の進んだ学校が少なく、私立高校も10校以上見学するが、「自立した生徒でないと、受け入れられない」と、面と向かって言われたこともあった。母は、特別支援学校にも足を運んでくれたが、大学進学のためのカリキュラムを組んでいるような学校はなかった。



▲普段勉強している学内の一室

ようやくたどり着いた大阪府立の高校でも、介助者探しに難航。主治医や学校に相談し、高校1年生の秋頃にサポートの環境が整ってきた。大学進学時には、家が近いことと、バリアフリーなどの環境面、学生相談・支援センターの存在がきっかけで、関西大学を受験。入試には困難を伴ったが、濱谷さんの取り組みと、試験会場での支援スタッフのサポートで、無事合格することができた。

「学部生の頃は、いろいろな授業を受けて、ゼミ合宿で明日香にも行き、とても楽しかった」とほほ笑む声は、充足感に満ちている。知

アスピレーションのままに 進学できる社会を

身体障がいを抱える人々の学びと願い

●社会学研究科 社会学専攻
博士課程後期課程2年次生 濱谷 美綺 さん

重度の身体障がいを抱えながら、関西大学の社会学部で学び、さらに大学院前期課程へと進み、現在、後期課程で研究を続けている社会学研究科の濱谷美綺さん。平日は毎日大学に通い、研究活動に励む。誰もが進学できる社会を願い、持ち前の向学心で挑むのは、自身も対峙した壁を打ち破ることだ。

識は深まり、視野も広がった。新しい友達もできた。それでも入学当初は、介助者をつけられないという問題にも直面。「障害福祉サービスを利用しようとしたところ、そのサービスの制度上、学内での介助が認められなかった」。濱谷さんは本学学生相談・支援センターや市役所にも相談し、ねばり強く交渉。その努力が実り、介助者付き添いでのキャンパスライフが可能になった。

このような体験から着想したのが、現在までの研究テーマ「重度身体障がい者の大学進学」だ。修士論文では、修学における「環境」に焦点を当て、大学に進学した重度の身体障がい者にインタビュー調査を実施。やはり進学には設備面と、人的サポートが必要不可欠だと再認識した。学会で発表も行ったが、「十分な設備がなく、サポートが受けられないために希望どおりの進学をあきらめた人たち」と出会うにつけ、重度障がい者の進学を阻む壁の高さも改めて実感した。

そして今、大学院で研究を進めているのが「教育アスピレーション(強い願望)」について。大学へ進学した重度の身体障がい者と、進学しなかった重度の身体障がい者とをさまざまな観点から比較し、障がい者の教育や学習への願望の形成要因を明らかにしようとしている。「一般的に教育アスピレーションは、親の教育方針や先生との関わり方などに影響を受けると言われていますが、重度の身体障がい者の実情を知りたいと思っています」。

濱谷さんは、丁寧な研究を信条とする。「あまり高い目標を立てたりはせず、きっちり、一つ一つですね」。どんな壁も、一つ一つ確実にクリアしてきた半生そのままに、学問の道もしかりだ。世の中には、意欲がありながら、外的な要因によってそれを阻まれる人がいる。「そんな人を少しでも減らしたい」。最後にこれからの抱負をそう結んだ。

濱谷 美綺 —はまたに みき
■1995年大阪府生まれ。大阪府立東淀川高校、関西大学社会学部卒業。先天性ミオパチーという難病を抱えながら、勉学に励み、2018年から関西大学大学院で同じ重度の身体障がい者の進学問題について研究している。



ふるさとの地勢から 防災に関心を持つ

能動的な姿勢が求められる学びの場

●社会安全研究科 防災・減災専攻
博士課程前期課程1年次生 山崎 健司 さん

地震など災害による直接的・物理的な原因の死でなく、避難生活の身体的負担による病気の発症や大きな精神的ストレスにより亡くなることを指す“災害関連死”。山崎健司さんはこの問題と持病との関係について研究に取り組み、学部時代には卒業論文を学会で発表、大学院でも研究をさらに掘り下げて極めている。

山崎 健司 —やまさき けんじ
■1999年高知県生まれ。土佐塾高校卒業。2022年関西大学社会安全学部卒業。学部在学中より「災害関連死と持病の関係」について研究を重ね、21年に日本自然災害学会で研究発表する。22年、地域安全学会にて奥村与志弘教授との共著となる論文「国際疾病分類を用いた災害関連死と持病・既往症の関係分析」は査読論文として認められる。



「私は高知県出身で、実家の目の前には海が広がっています。南海トラフ地震があれば甚大な被害を受け、津波の危険もある場所です。社会安全学部は防災が学べる日本で唯一の学部でしたので、ぜひそこで専門的に学びたいと思っていました」と話す、社会安全研究科の山崎さん。

研究テーマは「災害関連死と持病の関係」。友人が重度の食物アレルギーを抱えていたこともあり、「災害に遭った時、持病がある人の生活はどう守られるのか？」と考えたことがきっかけだった。そして、より防災への意識を新たにしたのは、入学後すぐに発生した大阪府北部地震。ボランティアに奔走しながら、身近にも災害は起きるのだと改めて実感、研究への意欲がよりかき立てられ没頭していった。

4年次生の秋を過ぎた頃には、まとめた研究が認められ、学会で発表することに。「研究者コミュニティで発表できるなんて、学部



▲フィールドワークでゼミ生たちと(前列右から2番目が山崎さん)



ゼミでの発表の様子



▲奥村与志弘教授(左)に教えられる山崎さん



▲社会安全学部 安全ミュージアムにて

生では異例のことで、これが自信につながりました。そしてもっと研究を続けたいという想いが募り、大学院への進学を決めました」。

大学院の同期は8名。学内進学者のほか、留学生や社会人もいる。いろいろな人と接することが新鮮だと楽しそうに話す山崎さん。進学後は学部での研究テーマを継続し、卒業論文をさらにブラッシュアップした「国際疾病分類を用いた災害関連死と持病・既往症の関係分析」が学術的に価値のある査読論文として認められたことで、納得いく一つの研究成果をあげられたと感じている。

この論文の共著となった奥村与志弘教授は、山崎さんの研究の源となる存在。「大学院への進学を考えた理由の一つが奥村先生です。防災・減災をどのように社会へ普及させていくのか、という問題を追求される姿を見て、先生の元でもっと学びたいと思いました」。大学院生となったことで、教授のフィールドワークに同行する機会も増えた。現場の声を聞くことで、座学だけでは学べない貴重な体験を得ると共に、教授からは「人としての生き方」も学んでいるという。「自分から進んで全国について回っています(笑)」。『自ら学びを探しに行く』というのは、大学院で求められることの一つ。能動的に学ぶ姿勢が大事だと思っています」。

現在は日曜や祝日も関係なく取り組んでいる研究の合間に、後輩となる学部生の指導を行うほか、学内のITセンターなどでも業務補助をする忙しい毎日。コロナ禍前に行っていた「足湯ボランティア」も早く再開した



▲足湯ボランティア活動の様子(右端が山崎さん)

い、と東奔西走の毎日を送るが、自分のやりたいことばかりなので苦になるどころか、日々充実していると感じている。「さまざまな出会いの機会が多いのは大学院のメリット。視野も広がるので、自分の可能性も広がりますよ」と後輩へメッセージを送る。

山崎さんも自身の可能性を探っている真最中。和歌山の介護施設で携わっているBCP(事業継続計画)の作成や、学会の懇親会で話を聞いたJICA 青年海外協力隊など、やりたいことや興味のあることは数々ある。「大学院に入って新しく知る世界や多角的に考える機会も増えたので、将来の自分を考えると楽しみで仕方ありません」。

LEADERS NOW!

看護師から研究者へ

「視野を広げたい」と一念発起

●総合情報学研究科 総合情報学専攻
博士課程後期課程 2 年次生
高橋 えりさん



快活で親しみやすく、柔らかな語り口。「学究の徒」の硬いイメージとにわかに結びつかない高橋えりさんは、総合情報学研究科の博士課程後期課程で学ぶ大学院生だ。総合情報学部入学から 8 年。国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) の「次世代研究者挑戦的プログラム」にも選ばれた成績優秀者でもある。もともと看護師だった高橋さんが「学び直し」を決めた経緯を聞いた。



▲頼もしいスタッフがいる高槻キャンパス図書館

●背中を押してくれた言葉

高橋さんは、大阪大学医療技術短期大学部を卒業後、病院や看護学校の教員、訪問看護ステーションなどで、看護師としてのキャリアを積んだ。

そんな中、実習指導などで患者や家族と接するうち、医療だけでは対応しきれないことがあると感じるようになった。「例えば、精神・知的障害のある人たちは、貧困と密接な関係があり、医療だけでなく、社会制度で何とかしないといけない面がある。そんなこともあって、もう少し勉強したいと思うようになりました」。

自らの視野を広げたいという思いだったが、迷いがなかったわけではない。その頃、学生時代に所属した水泳部の先輩と話す機会があった。先輩は大学を卒業後、エンジニアとして勤めたメーカーを 60 歳目前に早期退職し、エベレスト登山への準備で運動機能の勉強をするため、改めて信州大学に入り直していた。「まだ若いんだから、いくらでもやりようがあるよ」。当時、40 代後半だった高橋さんの背中を押したのは、その先輩からの一言だった。夫も賛同してくれた。

●世代の異なる学生とともに学ぶ生活

関西大学総合情報学部を選んだのは、社会人対象の入試があり、学際的なカリキュラムでいろいろな分野が学べることに魅力を感じたから。短期大学での修得単位を読み替えるのは、当時のシラバス等を揃えることも難しく、思い切って 1 年次生から始めることにした。

「体力には自信があります」と言うように、学部の時毎日、電動自転車で自宅から往復 1 時間半近くかけて通学した。「周りの学生と一緒に昼を食ったりしますよ」と、年齢差を気にする様子はない。また、学内の「ライティングラボ」でチューターとして、レポートや論文など文章作成に関する学生からの相談にも応じている。「キャンパスを掃除する女性から『暑いから気をつけてと声をかけてくれる学生が何人もいる』と聞きました。関大は心が優しい学生が多いと思います」。

学部では好きなことを幅広く勉強していたが、もっと深く専門的に勉強したい気持ちが生まれ、大学院進学を考え始めた。これは想定外だったという。「4 年分の学費は用意していましたが、大学院まで行くことは考えていませんでした」。仕事をしながら通うことも考えた。だが、夫が「やるなら中途半端なことはせず、ピシッと集中した方がいい。学費のことは心配するな」と後押ししてくれた。



▲学部卒業式で友人たちと記念撮影 (2019 年)

●「人は年を取るほどになぜ親切になるのか？」

2021 年 3 月に総合情報学研究科社会情報学専攻博士課程前期課程を修了。そして今、総合情報学専攻博士課程後期課程 2 年次生として「高齢者の向社会行動規定要因・社会情動的選択性理論の枠組による実験的検討」をテーマに研究を続けている。

「社会情動的選択性理論」は米国スタンフォード大学の心理学者、ローラ・カーステンセン教授が提唱した。若者のように、残された人生が多いと感じる人は、長期的目標を掲げてつらくても頑張ろうとするが、残された人生が少ないと感じるほど、情動的な満足や短期の目標に照準を合わせるようになる。つまり、残さ



▲高槻の豊かな自然が一望できる高橋さんの研究スペース

れた人生の長短の認識によって人の目標は変化するという理論だ。

一方、向社会的行動は、人に親切にする行動を指す。「不思議なことに人は年を取るほど親切になる傾向があります。自分の利益にならないのに、朝早くから子どもたちの登校を見守ったりします。なぜそうなるのかというリサーチクエストンがありました。向社会的行動は社会情動的選択性理論と結びつくのでは、というのが私の仮説です」。

その仮説を立証するため、指導教員の森尾博昭教授とともにオンラインでの調査に取り組む。昨年、50 歳以上の 500 人を対象に、「自分に残された寿命があと〇年」と想定した上で、いくつかの行動の動機と意図について尋ねた。その結果、一定の傾向はつかめたものの、まだ十分とは言えず、残された人生と動機付けの関連を調べる調査はこれからも続ける。

●看護師と研究の両立を目指す

大学で学ぼうと思った動機の一つに「起業」への関心があった。訪問看護や実習で出会った患者の家族には「家族がそうなったから」「周囲に助けてもらったから、今度は自分が助けたい」と、通所・入所施設や NPO 法人を設立した人たちがいた。学部の卒業論文で「高齢者の買い物難民」を、修士論文では「地域の相互扶助」を取り上げたのも、そうした関心と無関係ではない。

しかし、後期課程修了まで約 1 年となった今、起業よりも今の研究を続けられる道を模索中だと言う。なぜなら、「やり残しがあるというか。研究は一段落することはあっても、3 年で答えが出るものではない」と思うようになったからだ。深く専門的に学びたいと踏み出した研究の道は、思った以上に性に合ったようだ。

一方、看護師として再び働きたいという気持ちも強まり、看護師と研究が両立できる環境を目指し「来年は頑張って就活します」と笑った。

研究もする看護師。9 年間の学業生活を経た高橋さんの活躍の場は、より大きく広がっているに違いない。

高橋 えり——たかはし えり

■1968 年大阪市生まれ。大阪大学医療技術短期大学部看護学科卒業。看護師として病院や看護専門学校教員、訪問看護ステーションなどの勤務を経て 2015 年、関西大学総合情報学部総合情報学専攻博士課程前期課程入学。19 年、総合情報学研究科社会情報学専攻博士課程後期課程入学。21 年から同研究科総合情報学専攻博士課程後期課程在学。

LEADERS NOW!



アカデミズムという手法で 三方良しの 雇用をめざす



▲中川さんの著書
(SDGs経済出版 2022年)

無関心に関心に変える イシューキュレーター

●人間健康研究科 人間健康専攻
博士課程後期課程 1 年次生 中川 悠 さん

赤いメガネに、赤いネクタイ、赤い靴下に、赤いバッグ。「“大阪 赤メガネ” でググったら、私が出てくるんですよ」。本当に関連するウェブサイトが上位検索されるほど、赤がトレードマークになっている中川悠さん。2022 年 4 月から関西大学大学院生となり、障がい者の雇用について研究しているが、その経歴が実にユニーク。大学院生でありながら、法人の代表であり、大学講師でもありながら、市役所のアドバイザーでもある。

中川 悠——なかがわ はるか

■1978 年兵庫県伊丹市生まれ。大阪市立大学大学院創造都市研究科修了。「社会の無関心に関心」をテーマに掲げ、2007 年に株式会社 GIVE&GIFT、12 年に NPO 法人チュラキューブを設立。関西を拠点に、障がい者福祉・都市農業・伝統工芸・地域活性化・地域食堂・教育分野など、幅広い取り組みをプロデュースするかわら、関西大学をはじめ多くの大学で教壇に立つ。

●編集者ならではの発想と行動力

大学院の人間健康研究科に入学したのは、2022 年 4 月のこと。「20 代の若者の中に、40 代のおじさんが交じって勉強しています」。修了の要件である論文 3 本を書き上げるため、勉学に励む。一方で、2016 年から現在まで関西大学の人間健康学部で、学生たちに社会起業論や雇用政策について教える教員でもある。「大学院の指導教員でもある岡田忠克先生に、声を掛けていただいたんです」。岡田教授とは、十数年来の知己。「出会いのきっかけは、私が大阪市内のオフィス街でプロデュースをした障がい者福祉作業所でのことです」。社会福祉政策が専門の岡田教授の目に映ったのは、ユニークな方法で障がい者の支援活動をする中川さんの姿だった。

20 代で大手出版社に就職。情報雑誌の担当となり、編集の何たるかを体得する。独立して編集制作会社を立ち上げたのが 29 歳のとき。その会社は現在、大阪市北区に事務所を構える。同所は中川さんが代表を務める NPO 法人の拠点でもある。法人格の違いはあれど、どちらも取り組んでいるのは「社会の困りごとの解決」だ。「起業した頃から既に、いわゆるソーシャルビジネスに興味があったんです。少子高齢化や労働人口が減少する中で、現代社会が抱えるさまざまな課題に向き合っています」。

長らく注力しているのが障がい者支援だ。障がいのある方々が、福祉施設で軽作業をして得る対価の低さに愕然としたのがきっかけで、「編集の力で課題を解決できないかと動き出した」。社会福祉施設のプロデュースに始まり、施設内での冷凍ロールケーキ製造、印刷物の封入やデータ読み取り作業、さらにはお墓参りの代行、カフェ運営など、編集者ならではの発想と行動力で、精神障がいや知的障がい、身体障がいを抱える人たちのために次々と仕事を生み出してきた。「取り組みの多くが平均工賃を上回り、何より皆さん楽しく仕事することができた」。

福祉施設での仕事創出は順調だったが、やがて少し行き詰まる。当然だが、施設は営利組織ではなく、営業力にも乏しい。中川さんが離れてしまうと仕事が減ったり、なくなったりという事態に陥った。「継続的で安定した仕事と賃金を確保し、障がい者の将来をハッピーにするためにはどうすればいいのか」。悩む中川さんは、その頃続々と舞い込んできていた企業からの相談に活路を見出した。

●三方良しの新しい雇用のカタチ

現在、企業には一定の割合で障がい者を雇用することが義務付けられている。しかし、その数は伸び悩んでいるのが実情で、理由としては障がい者の特性に合わせた仕事や、やりがいを持つ仕事を企業側が生み出しにくいことが挙げられる。そして、そこそが企業が中川さんに相談していた課題だった。そこで中川さんが考えたのが、企業に雇用された障がい者が、地域の子ども食堂や高齢者向けの食堂などを運営する社会貢献団体に在籍出向するというスキーム。賃金は企業が受け持ち、実務は食堂での調理や配膳、接客などにあたる。企業は社会的責任を果たし、常に資金と人材不足に陥っている社会貢献団体はそれを解決できる。そして、障がい者はやりがいのある仕事に継続して就ける。すべての人という意味のユニバーサルと、リクルートを組み合わせたこの「ユニクリク」という雇用形態は、まさに三方良しの仕組み。障がい者にとっては従来の福祉施設での作業に比べ、所得も格段に上がる。収入が増えることで、貯金ができる、旅行のことを考えたり、恋人ができたりもする。「正社員という安定的地位や充足感が生まれ、生活が一変するんですね」。現在まで複数の企業がユニクリクを活用。中川さんは新たな雇用主の開拓に努めている。

●受け継がれてきた熱い血

活動は障がい者支援にとどまらない。例えば、大阪市と協業し、農家の付加価値を創出するために、イタリア野菜の栽培をバックアップ。さらには淡路島の商店街振興、企業の SDGs 活動や CSR 活動のサポート、ソーシャルビジネスに関するイベント開催や



▲(左) JA 大阪市から寄贈された野菜



(右) あべのHoopで開催されたおおさかイタリア野菜研究ラボ「大阪市農業応援マルシェ」



▲堺市役所内にある社会福祉法人コスモスが運営する「森のキッチン」での講演



▲娘さんのために作った、見事な妖怪キャラ弁



ワークショップなど、「issue (問題点)」と「curator (企画者)」を組み合わせたイシューキュレーターとして、毎日分刻みのスケジュールをこなしている。かと思えば、奈良県生駒市役所の「コミュニティデザインのプロ人材に採用され」、市民団体へ助成金についてのレクチャーをしたり、同市が推進するスマートシティ構想に参画したり、ふるさと納税事業のサポートをしたりで、週 2 回以上は出勤する。ワーカホリックかと思いきや、週末は娘のためにキャラ弁を作るパパにもなってしまうというから驚きだ。

「やりたいこと、続けていきたいことがあるのに、できない。そんな人たちのハッピーのために見返りを求めずに助ける」。この思いの端緒は、幼い頃にさかのぼる。「祖父が精神科医院の院長、父親は身体障がい者のための義手・義足の研究開発者でした」。思い通りにならないもどかしさを抱えながらも、ポジティブに生きようとする人たちを、ずっと目にしてきた。そして、そんな人々が前を向けるように手助けをする家族の姿を見てきた。「人に覚えてもらうため」と照れ笑う赤のコーディネイトも、実は赤いメガネをかけていた祖父の影響だ。受け継がれてきた赤い血が、熱く脈を打つ。

●届かなかった人たちへ届けたい

20 年余りにおよぶ社会的弱者を支援する活動。十分な実績が数多くのメディアに取り上げられ、大学やフォーラムで伝え教える立場になってもなお、中川さんが大学院での「学び直し」にチャレンジするのはなぜなのか。「一言でいうと、論文を書くことで、さらに深い視点で考える力を身につけるためですね。それを通して、より多くの人たちに障がい者雇用の実態を知ってもらおう。無関心に関心に変えてもらいたいです」。テレビや新聞、ウェブなどでは接触に限りがある。研究者や経営者に気づきを与えられればと語る中川さん。「これまで私は、ニュース性の高いソーシャルビジネスを展開して関心を集めようとしてきました。研究・学術論文というアカデミズムは、従来とは違った新しい力になると思っています」。障がい者に仕事を任せるのは難しいと考える雇用主の固定概念を払拭し、雇用を促進させる。そして、携わる人々を増やし、ムーブメントを起こす。中川さんの学び直しと論文にかかる期待は大きい。



▲(左)「杉本町みんな食堂」に八尾の農家の辰巳さんから寄付された野菜たち
(右) 長年、愛情深く関わった京都産業大学の東田教授やゼミ生たちの一枚

LEADERS NOW!



●自分探しのために大学院へ

「もともと歴史が好きでしたが、学校の授業で学ぶのは日本や中国、ヨーロッパ、アメリカの歴史がほとんど。中央アジアの歴史はシルクロードぐらいで、自ら進んで学ぼうとしないと学べない地域という点に惹かれました」。大学では中央アジアやイスラム圏の歴史を勉強したいと考え、関西大学文学部に入学した初瀬さん。2年次からは歴史学専修に所属し、4年次の夏に当時の東洋史研究室が中心となって企画したツアーで、中国のウルムチからタクラマカン砂漠を縦断してカシュガルまで訪れたのをきっかけに、さらに周辺の国々への関心が深まった。卒業論文では、ウズベキスタン特有の地域コミュニティ「マハッラ」をテーマに、「ウズベキスタン マハッラにおける日常的慣習と儀式の変容」をまとめた。

一方、他の同級生と同じように学部卒業後は企業への就職を目指していた。歴史を学び、旅行も好きだったことから、旅行会社など観光業界への就職を考え、2年次にはエクステンション・リードセンターで旅行業務取扱管理者講座を受講し、資格も取得。着々と準備を進めていた。しかし、実際に自己分析やエントリーシー

歴史研究で 培われた探求心

一つひとつの経験が
自身の強みと糧に生まれ変わる

●住友電気工業株式会社

初瀬 圭さん 一文学研究科 総合人文学専攻 2010年修了

文学研究科で歴史学を専攻し、修了後、非鉄金属を取り扱うメーカーに就職した初瀬さん。研究を深めるためというよりも、むしろ社会に出るための準備期間として大学院進学を選んだ彼女は、専攻した歴史とは全く関連のない進路を選んだ。彼女の中では、単なる遠回りではなく、“意義ある遠回り”だった。

初瀬 圭—はつせ けい

■1984年鹿児島県生まれ。2008年関西大学文学部総合人文学科歴史学専修(東洋史)卒業。2010年関西大学大学院文学研究科総合人文学専攻西洋史学・アジア史学専修修了。同年、住友電気工業株式会社入社、一貫して物流部門を担当。3児の母でもあり、現在は3人目の子どもの育児休業中。今春、復職の予定。



▲中国新疆ウイグル自治区にて(2007年)

トを書こうとすると、学生時代に力を入れたこと、いわゆる「ガクチカ」でペンが止まってしまった。「学生時代に夢中で取り組んだものが何一つ浮かびませんでした。こんな自分では社会に出る素質が足りないのではないか、せめて学生時代に一生懸命取り組んだと胸を張れるものを見つけてから社会に出たいと思い、大学院への進学を決めました。その点で、自分にとっては、いわゆる社会に出るためのモラトリウム期間と言えますね」。

●確固たる自信を得られた有意義な大学院生活

大学院では20世紀初頭のロシア革命期の中央アジア史に関心をもち、当時のソビエト政権下に生きたムスリム知識人の一人、ゼキ・ヴェリディ・トガンに焦点を当てて研究を続けた。しかし、歴史学の分野は調べれば調べるほど先行研究にぶつかり、研究テーマの設定に悩むことも。新しいテーマを模索するための資料を原著で読み解く語学力も一朝一夕には涵養できない。歯がゆさを感じる日々の連続。「来る日も来る日もデータベースで古い文献を探し、そこからまた関連資料を探して……という無限のプロセス。大学図書館の書庫にこもって文献や辞書にとらめっこしても、1ページさえ進まないこともありました」。そんな日々を重ね、もが

いていると、「自分の中で後悔も未練もないところまで研究に没頭し、やり切ったという境地に至り、何だか気持ちが晴れました」。学部生の頃には経験できなかった“研究に没頭する”2年間を経て、社会へ踏み出す自信がついた。

●たとえ遠回りでも納得して踏み出せる一歩を

初瀬さんが就職したのは、電線やケーブルなど、社会インフラを支える製品を生産する住友電気工業株式会社。研究テーマとは全く分野が異なる。しかし、そこには大学院での歯がゆい経験が志望理由に関係していた。「歴史の研究が取扱うのは自分の目で確かめられない過去の事件や出来事。私はさまざまな文献に当たっても、なかなか成果に結びつけることができませんでした。だからこそ、進路を考えるにあたっては「現地」「現物」「現実」の「三現主義」を大切にしている製造業界、自分の目で見るができるものを扱えるメーカーに魅力を感じました」。

就職活動中の面接では、よく「なぜ大学院に進学したの?」「なぜ歴史の研究をしているのに企業に就職するの?」と聞かれた。そのたびに社会に出るには遠回りをしていることを痛感させられた。しかし、初瀬さんの脳裏に思い出されたのは歴史家トーマス・カーライルの『明確な目的があれば、どんなに険しい道でも進むことができる。その一方で、目的がなければ、平坦な道でさえ進むことができない』という言葉。「一般的に考えれば、私が選んだ道は自分探しのモラトリウム期を経た分、遠回りをしていますよね。それでもこの言葉に出合ってから、時間がかかっても“社会へ出る”という目的をもって自分が納得した道を進んだことは間違いではなかったと思えました」。

●オンリーワンの強みや糧を持つこと

入社後は、同社グループ全体の物流を担当するSEIロジネット株式会社に籍置き、担当製品の国内・輸出入の物流アレンジ、料金管理などを担当している。大学院での研究を通じて身に付いたのは、正解がない中で納得解、最適解を見つけ出せる探求心だろう。「私が今担当している物流部門は、必要な時に必要なものを必要な場所に適正なコストで運ぶというのが使命。社会情勢や経済動向に左右されやすいので、限られた時間の中で状況を見ながら検討を重ね、最終的な決定を出すことは簡単ではありません。しかし、皆に満足してもらえるような納得解、最適解を導き出そうとする時、大学院での研究を通して、諦めず探求し続けた経験が今の仕事にとっても役立っています」。

現在は3人目の子どもの育児休業中であるが、今春には復職の予定。社員が働きやすい環境が整っていることもあり、この仕事を長く続けたいと話す。「大学入学時はまさか自分が大学院に進学するとは想像もしていなかったけれど、結果的にあの2年間が私には人生の転機になりました。経験というものはその時限りで各々バラバラなものと思いがちですが、長い人生においてそれぞれがつながり、自身を形作ります。経験の希少性や大小よりは、経験が2つ3つと増えて掛け合わせっていくことで自分にしかない強みや糧になります。学生の皆さんには、色々な挑戦や経験を次に活かしていくことで、オンリーワンの強みと糧を増やしてほしいですね」。



1



2

سمرقند サマルカンド



3

- 学生時代に訪れた国々(イスラム圏)
- 1,2 ウズベキスタン・サマルカンド(2008年)
- 3 中国新疆ウイグル自治区・カシュガル(2007年)
- 4 ウズベキスタン・タシュケント(2008年)
- 5 チュニジア・ケルアン(2009年)
- 6,7 ウズベキスタン・ブハラ(2008年)
- 8,9 チュニジア・ドゥッガ遺跡(2009年)

قەشقەر カシュガル

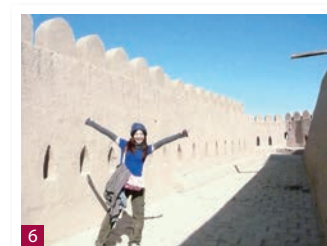


4

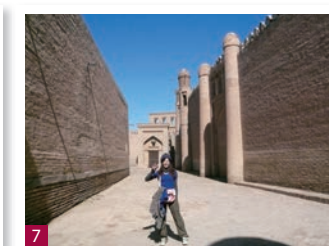


5

تاشكند タシュケント



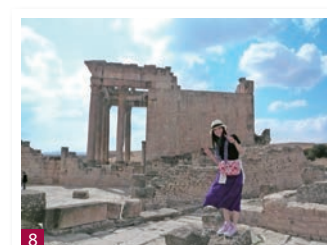
6



7

القيروان ケルアン

بُخارا ブハラ



8



9

دقة ドゥッガ

関西大学フェスティバル in 関西



DAY
1

校友お笑いステージ

Comedy Live Show

KANSAI UNIVERSITY Festival in KANSAI
関西大学
フェスティバル in 関西
おかえりなさい。あなたの関大に、きっと逢える。

2022年10月 9・10日開催

10月9・10日の2日間にわたり、
大学昇格100年記念・関西大学フェスティバル in 関西を開催した。
関西大学フェスティバルは、大学・校友・父母相互の絆を一層深め、
本学の多彩な魅力を発信するイベントで、3年ぶりの開催。
今年は大学昇格100年を記念し、千里山キャンパスを会場に
さまざまな大規模イベントが展開された。

DAY
1

校友アーティストライブコンサート



Live Concert

LIVE Set List

ココロオークション

- ・フライサイト
- ・ハンカチ
- ・ヘッドフォントリガー
- ・夢の在り処
- ・ナゾノクサ
- ・蟬時雨
- ・火花

草野 華余子

- ・Trigger
- ・LOVE IS BAD COMEDY!
- ・断線
- ・カメレオンの憂鬱
- ・マーメイド・ララバイ
- ・それでも、まだ
- ・僕ら死ぬまで旅の途中

矢井田 瞳

- ・Look Back Again
- ・Ring my bell
- ・さらりさん
- ・B'coz I Love You
- ・Buzzstyle
- ・My Sweet Darlin'
- ・駒沢公園



関大
出身 ジャルジャル

後藤 淳平
(経済学部卒業)

福徳 秀介
(文学部卒業)



関大
出身

よじょう
(社会学部卒業)

奥田 修二

ガクテンソク



インディアンズ

関大
出身

田淵 章裕
(経済学部卒業)

木村 亮介



関大
出身 矢井田 瞳

(文学部卒業)



関大
出身 草野 華余子

(社会学部卒業・軽音楽部出身)



MC 福田 麻貴
(3時のヒロイン・商学部卒業)



MC かなで
(3時のヒロイン)



クイズ関大王

関西大学フェスティバル in 関西



(ジャルジャル・
後藤淳平さんの実父)
後藤圭二吹田市市長が
サプライズ登場!



関大
出身 ゆりやんレトリィバァ
(文学部卒業)



粟子 真行
(Vo.&Gt.)



テンメイ
(Gt.)

関大
出身 ココロオークション (軽音楽部出身)



大野 裕司
(Ba.)



井川 聡
(Dr.)



サプライズゲストに
越前屋 俵太さん

関大
出身 MC 加美 幸伸
(社会学部卒業)



全員で学歌斉唱

■関西大学フェスティバル in 関西



オープニングセレモニー
Opening Ceremony

DAY 1



関大グルメフェス Gourmet Festival



DAY 1

初日は、メインステージの悠久の庭にてオープニングセレモニーを実施。開会宣言のあと、校友の海洋冒険家・堀江謙一さん、落語家・桂文枝さん、フリーアナウンサー・宮根誠司さん、南海キャンディーズ・山里亮太さん、フットボールアワー・岩尾望さんからのビデオメッセージが紹介された。続く「校友お笑いステージ」では、3時のヒロイン・福田麻貴さん、かなでさんをMCに、インディアンズ、ゆりやんレトリィバァ、ガクテンソク、ジャルジャルがネタを披露。本学出身のお笑い芸人が大集合し、1,000人を超える観客を笑いの渦に巻き込んだ。クイズ企画「関大王」では、後藤圭二吹田市長がサプライズ登場し、ジャルジャル・後藤淳平さんとの親子共演となった。

中央体育館での「校友アーティストライブコンサート」では、ラジオDJの加美幸伸さんがMCを務め、ココロオークション、草野華余子さん、矢井田 瞳さんが登場。エンディングでは、出演者全員で学歌を斉唱し、豪華コンサートの幕を閉じた。

その他、校友や関大前商店会が出店する「関大グルメフェス」をはじめ、校友会支部・組織、大学のゼミ等によるブース出展、学生団体の展示やステージ等を行った。また、地域と大学をつなぐイベント「まちFUNまつり2022」も3年ぶりに同日開催され、スポーツ体験やサイエンスショー、謎解きイベント、近隣自治会によるブース等に多くの親子が参加。約11,000人の来場者は関西大学での1日を楽しんだ。

KANSAI UNIVERSITY Festival in KANSAI
関西大学
フェスティバル in 関西

おかえりなさい。あなたの関大に、きっと逢える。



2022年10月 9・10日開催



校友会支部・組織ブース
Alumni & Alumnae Association Booths



展示ブース
Exhibition Booth



まちFUNまつり Machi FUN Matsuri

DAY 1



Symposium

教育後援会 特別企画シンポジウム



校友総会・記念講演 General Meeting & Memorial Lecture



司会 塩尻 奈都子
(総合情報学部卒業)



河内 國平さん
(刀匠／法学部卒業)



堀江 謙一さん
(ソロセラー・海洋冒険家／第一高等学校卒業)

DAY 2

2日目は校友総会を開催し、全国各地から約1,000人の校友が参加した。第1部の総会では、フリーアナウンサーの塩尻奈都子さんによる司会のもと、田中義信校友会長の挨拶にて開会。会務報告、感謝状贈呈、各種表彰が行われ、学術文化・芸能・スポーツ活動功労者を表彰する校友会表彰では、刀匠・河内國平さん、ソロセラー・海洋冒険家・堀江謙一さんが受賞した。

第2部の記念講演では、宇宙飛行士の野口聡一さんが「人文社会×宇宙：理工学教育のさきにあるもの」をテーマに講演。昨今の民間企業による宇宙の商業化を背景に、宇宙開発は「人類生存の可能性を問う」ことから、「宇宙での豊かな生活を実現する」事業へと移行していること、そしてそれを実現するためには、理系分野だけではなく、人間の内面を掘り下げるための人文社会分野が重要だと語った。



記念講演



野口 聡一さん (宇宙飛行士)

Topics ■トピックス [学内情報]

◎カーボンニュートラル研究センター設立記念シンポジウムを開催

文理融合でカーボンニュートラルの実現へ



北原聡 カーボンニュートラル研究センター長による開会挨拶

関西大学は、カーボンニュートラル社会実現への貢献及び関連研究についての情報発信の強化を目的に、10月1日、カーボンニュートラル研究センターを設立し、19日、その記念シンポジウムを千里山キャンパスにて開催した。

従来のカーボンニュートラル研究は理工系分野からのアプローチが主軸だが、同センターは理工系の教員だけでなく社会科学・人文科学系の教員を多く配置し、文理融合の研究体制を構築。今

後は、国内外の研究機関・企業等とも連携しつつ、カーボンニュートラルに係る「学外機関との共同研究プロジェクトの推進」、「学術研究成果の普及」、「各種情報の収集と学内外への発信」などを通じて、カーボンニュートラル達成に貢献する。

シンポジウム当日は、総合地球環境学研究所所長の山極壽一氏が「科学と文化のマッチングによるカーボンニュートラル」、環境省大臣官房環境教育推進室室長の河村玲央氏が「地域脱炭素において大学に期待する役割」について、基調講演を実施。その後、本学と連携協定を結ぶ関西電力株式会社並びにDaigasグループが、各社のカーボンニュートラル実現に向けた取り組み事例を紹介し、文理それぞれの観点から、本学教員がカーボンニュートラルに関わる研究報告を行った。



▲山極壽一 総合地球環境学研究所所長 (オンライン参加)



▲河村玲央 環境省大臣官房環境教育推進室室長による基調講演

UHA味覚糖「忍者めし」との
コラボレーション商品
「関大めし」を発売

「勝利」に導く関大式携帯グミで 関大生を応援！



学生への応援フレーズ

- (左より)
- 「腹が減っては就活できぬ」
 - 「勝利のための小腹満ちし」
 - 「今日も関大に勝利あり!」
 - 「魅せる!関大生の底力」

関西大学はUHA味覚糖株式会社と連携し、関大式携帯グミ「関大めし」を発売した。10月31日から大学構内の売店や一部小売店で販売が開始。発売を記念して就活イベントの参加学生や、体育会・文化会・学術研究会の各部などを対象に、合計2,000個を無料配布した。

「関大めし」は、UHA味覚糖の人気商品「忍者めし」のコラ



▲キャンパス構内の大学生協、コンビニで販売されている「関大めし」

ボ商品。関大生応援企画の一環として、就活に挑む学生や体育会「カイザーズ」を勝利に導くアイテムとして開発された。噛み応えのあるハードグミで、フレーバーは本学のブランドカラーでもある紫紺色の巨峰味。パッケージは就活や体育会の競技をイメージしたイラスト4種で、「腹が減っては就活できぬ」等、学生への応援フレーズを載せて、面接前や試合の集中力をアップといったシーンでの活用を想定している。

JOINT x PROGRAM ■社会貢献・連携事業／地域連携

◎「関大防災Day2022～広がれ！みんなの安全・安心！～」を実施

参加者約1万人による大規模避難訓練&防災イベント



10月20日、学生・教職員・近隣住民ら約1万人が参加する大規模避難訓練「関大防災Day2022～広がれ！みんなの安全・安心！～」が千里山・高槻・高槻ミュージズ・堺・北陽・梅田の全6キャンパス及び東京センターで実施された。

「関大防災Day」は、「地域防災力の向上」及び「本学構成員の防災意識の向上」を目的に2010年から実施している関大独自の防災啓発行事。地元自治体・民間企業などとも連携し、大規模避難訓練だけでなく、地域防災に役立つ体験ができる防災イベントなど、多方面から防災啓発を図る。

13回目となる今年は、授業中にマグニチュード7.6(震度6強以上)の「上町断層直下地震」が発生したと想定し、本学オリジナルの「地震対応マニュアル」に基づいて、学生・教職員の避難から誘導、安否確認に至るまでを実施した。また、千里山キャンパスでは、実際の揺れを体感する起震車体験をはじめ、水没車からの脱出体験、応急処置体験、消火器・消火栓放水体験、学生団体による防災クイズ、災害用備蓄倉庫見学ツアーなど、さまざまなイベントが開催された。



千里山キャンパスでの消火器体験▶

◎「Osaka Flower Carpet 2022」の花絵アートプロジェクトに関大生が参加

「太陽の広場」を巨大な フラワーカーペットで彩る



11月25日～27日、万博記念公園で開催された「Osaka Flower Carpet 2022」に本学の学生が参加し、「太陽の広場」を生花による花絵アートで彩った。

本イベントは、2025年に開催される「大阪・関西万博」への気運の醸成を目的とし、市場で出回る基準に満たない規格外の生花を使用。イベント終了後は再生紙として廻らせ、お花のスケッチブックとして再利用されることから、SDGsの側面も兼ね備えている。

本学からは約50人の学生がボランティアとして参加。イベント前日には、花びらを茎から取り外すベタリング作業をキャンパスにて行い、当日は世界的な花絵師・藤川靖彦氏の総合監修のもと、大阪大学の学生と協力し、約100㎡の巨大なフラワーカーペットを創り上げた。完成セレモニーには大阪府知事や吹田市長、NMB48のメンバーも参加。期間中は多くの来場者が訪れ、会場は笑顔であふれた。

また、併催イベントとして、ららぽーとEXPOCITYで12月25日まで開催された花絵アートには、中戸詩織さん(マス・コミュニケーション学研究部)による「万博レガシーの継承とクリスマス」をテーマにしたデザインが採用された。



▲中戸詩織さんによるデザイン。テーマは「万博レガシーの継承とクリスマス」

KANDAI NEWS

■関大ニュース

「2025大阪・関西万博」 大阪ヘルスケアパビリオンに出展



2025年日本国際博覧会に向けて、本学が推進する事業企画「Academia × REBORN～学理と実際の調和」が、大阪ヘルスケアパビリオン「展示・出展ゾーン」でのリボンチャレンジに認定された。

本学では大阪のさまざまな中小・スタートアップ企業との共同研究を展開しており、この度の出展では、その実績やネットワークをもとに、大阪が持つ多様性を世界に広く発信する。展示のキーワードは、SDGsやカーボンニュートラル。未来の医療材料や食品、人とAIの新たな交流などの研究成果を、ホログラフィやCGなどの技術を活用し、直感的に把握できるコンテンツとする。

片岡愛之助客員教授による講演会を開催



10月10日、千里山キャンパスにおいて、歌舞伎俳優であり客員教授の片岡愛之助氏による講演会「伝統と挑戦～上方文化のこれからに向けて～」が開催された。

愛之助氏は、本学と同じ大阪で上方文化・歌舞伎を通じて挑戦を続けていることや、堺キャンパスのある堺市出身という縁から、2022年度より客員教授に就任。当日は、自身の生い立ちから六代目愛之助の誕生秘話まで、写真を交えながら紹介した他、歌舞伎についてわかりやすく解説。上方への思いを語る愛之助氏の言葉に、聴講者は一心に聞き入った。

三村孝仁客員教授による講演会を開催

11月24・25日、千里山キャンパスにおいて、テルモ株式会社前代表取締役会長の三村孝仁氏による「医療機器産業の現状とその魅力そして関大生へのエール」を開催した。



1977年に社会学部を卒業後、テルモに入社した三村氏は、全世界28,000人のアソシエイト(社員)を擁するテルモグループの会長職を2021年度まで在任。テルモでの45年間の経験・実績を通して、VUCAと呼ばれるこれからの時代、自分はどんな人生を歩みたいのか、志をもって社会に出てほしいと、後輩である関大生に熱いエールを送った。

野球部が3年ぶり8回目の神宮大会出場



▲神宮大会出場を決めた野球部(写真提供:関大スポーツ編集局)

2季ぶり39回目の関西学生野球秋季リーグ優勝を果たした野球部は、第53回明治神宮野球大会に第2代表として出場。18日の初戦は、東京農業大学北海道オホーツクに4-1で勝利。20日の準々決勝で明治大学に2-1で惜敗し、1972年以来50年ぶりの優勝には届かなかった。

OBの高野脩汰投手がドラフト2022でロッテから4位指名

プロ野球ドラフト会議2022において、野球部OBの高野脩汰投手(2021年卒業・日本通運)が、千葉ロッテマリーンズから4位指名された。高野投手は、高い奪三振能力を誇るサウスポー。今後、プロ野球界での活躍が期待される。



▲大学時代の高野投手(写真提供:関大スポーツ編集局)

ボクシング部 OBの寺地拳四朗選手がWBC・WBA世界ライトフライ級王座統一戦を制し、2団体統一



▲WBC・WBAライトフライ級王座統一を果たした寺地選手(左)(写真提供:福田直樹さん)

11月1日、さいたまスーパーアリーナで開催されたプロボクシング世界ライトフライ級王座統一戦において、体育会ボクシング部OBでWBC同級王者の寺地拳四朗選手(14年卒業・BMB所属)が、WBA同級スーパー王者の京口鉦人選手から7回にTKO勝利を収め、見事、2団体統一を果たした。

3年ぶりに対面で開催！ 第45回関西大学統一学園祭

11月3日～6日、第45回関西大学統一学園祭が千里山キャンパスにて開催された。3年ぶりの対面開催に加え、大学昇格100年を迎えた今年度のテーマは「0(ゼロ)からの祭起動」。0から学園祭を創り上げ、新たな一歩を踏み出すことで笑顔と活気を呼び起こし、たくさんの人に希望を与えたいという思いが込められた。



今年度は、模擬店やステージ企画をはじめ、学園祭ライブやタレント講演会なども復活。連日キャンパスは大いに盛り上がった。最終日には悠久の庭で「後夜祭」も開催。笑顔あふれる感動のフィナーレを迎えた。